

きている現状があるだろう。

総合的な少子化対策を進めていく上で、生命を次代に伝え育んでいくことや家族の大切さが理解されることが重要である。子どもの誕生を

祝福し、子どもを慈しみ、守り育てることは、社会の基本的な責任であることを、大人もこれから親になる若者も認識するように、社会全体の意識改革に取り組む必要がある。

コラム 子どもを大切にす文化

幕末から明治初期に日本を訪れた欧米人の多くが、日本の子ども達が様々な遊戯をしてにぎやかに遊んでいる様子や、礼儀正しくしつけられている姿、大人達が子どもを大切にし、子どもと遊び、子どもの成長を楽しみにしている様子を、驚きと好感、そして賛嘆をもって記録している²。

たとえば、幕末の駐日イギリス外交官であり『大君の都』を著したオールコックは、「子どもの楽園」という表現を使い、大森貝塚を発見したアメリカ人のモースは、「子どもの天国」であり、「世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない」と記述している。

1878（明治11）年、47歳にして単身で日本を訪れ、東北地方から北海道まで旅行をしたイギリス人女性のイザベラ・バードは、その著『日本奥地紀行』の中で栃木県・日光での見聞として、次のように書いている。

「私は、これほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。子どもを抱いたり、背負ったり、歩くときには手をとり、子どもの遊戯をじっと見ていたり、参加したり、いつも新しい玩具をくれてやり、遠足や祭に連れて行き、子どもがいないといつもつまらなそうである。他人の子どもに対しても、適度に愛情を持つて世話をしてやる。父も母も自分の子どもに誇りを持っている。見ていて非常に面白いのは、毎朝6時ごろ、12人か14人かの男たちが低い塀の下に集まって腰を下ろしているが、みな自分の腕の中に2歳にもならぬ子どもを抱いて、かわいがったり、一緒に遊んだり、自分の子どもの体格と知恵をみせびらかしていることである。その様子から判断すると、この朝の集会では、子どものことが主要な話題となっているらしいのである。」³

今では見られない光景ではあるが、男達が小さな子どもを抱いて互いに「子ども自慢」をしている様子が興味深い。これらの見聞記を読むと、明治以降の近代化から現代まで150年くらいの間、日本の子どもの行動や親と子の関係、地域社会の中での子どもの位置などにおいて、変化したもの、残っているもの、そして失われたものに対する感慨を呼び起こされる。

2 わが国における子育て意識の特徴

わが国は、戦後の経済成長に伴い、物質的な豊かさは飛躍的に向上したものの、前述したとおり、その間、経済的な豊かさや個人を優先させるライフスタイルの広がり等により、従来の子育てにおいて重要な役割を果たしていた家族の絆や地域の絆が薄まってきたことが少子化傾向にも影響を与えていると指摘されている。他

方、欧米諸国は、もともと経済的な豊かさや個人を優先する考え方が強かったにもかかわらず、最近では、フランスやスウェーデンのように、少子化の流れに歯止めをかけることに成功した国もみられる。

ここでは、日本、韓国、アメリカ、フランス、スウェーデンの5か国における子育ての意識を比較した調査（内閣府「少子化社会に関する国

2 渡辺京二著『逝きし世の面影』（2005年、平凡社ライブラリー）参照

3 イザベラ・バード『日本奥地紀行』（邦訳、平凡社。原書は1880年刊）

第1-5-10表 5か国における合計特殊出生率等の比較

	人口 (万人)	年間出生数 (万人)	合計特殊出生率	平均初婚年齢		労働力率 (15歳以上の男女) (%)
				夫 (歳)	妻 (歳)	
日本	12,777 (2005年)	106.3 (2005年)	1.25 (2005年)	29.8	28.0 (2005年)	60.4 (2005年)
韓国	4,829 (2005年)	43.8 (2005年)	1.08 (2005年)	26.9	23.9 (1983年)	62.1 (2004年)
アメリカ	29,366 (2004年)	411.6 (2004年)	2.05 (2004年)	26.7	24.8 (1988年)	66.0 (2004年)
フランス	6,218 (2004年)	80.0 (2004年)	1.94 (2005年)	27.7	25.6 (1987年)	55.4 (2004年)
スウェーデン	899 (2004年)	10.1 (2004年)	1.75 (2004年)	30.7	28.1 (1988年)	77.7 (2004年)

資料：人口：日本は総務省統計局「国勢調査」。韓国は韓国統計庁資料。アメリカはアメリカ厚生省資料。その他はEU資料。
 年間出生数：日本は厚生労働省「人口動態統計」、韓国は韓国統計庁資料、アメリカは疾病管制局(CDC)資料、その他はEurostat。
 合計特殊出生率：日本は厚生労働省「人口動態統計」、韓国は韓国統計庁資料。アメリカはアメリカ厚生省資料。その他はEurostat。
 平均初婚年齢：日本は厚生労働省「人口動態統計」。その他は「人口統計資料集2006年版」(国立社会保障・人口問題研究所)から引用。
 労働力率：日本は総務省統計局「労働力調査」。その他は厚生労働省「2004～2005年世界情勢報告」から引用。

際意識調査」(平成18年3月))を中心に、わが国の育児に関する考え方の特徴をみてみよう。こうした国際意識調査を政府が行ったのは初めてのことである。調査対象は、5か国の20～49歳までの男女(約1,000サンプル)である。なお、この5か国の合計特殊出生率や労働力率等を比較すると、第1-5-10表のとおりである。

(育児における夫婦の役割分担意識)

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について、肯定的な意見(「賛成」と「どちらかといえば賛成」の合計)が多かったのは、日本(57.1%)と韓国(48.5%)である。他方、否定的な意見(「反対」と「どちらかといえば反対」の合計)が多かったのは、スウェーデン90.7%、フランス71.4%、アメリカ54.6%である。

日本や韓国では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という性別での役割分担意識を持つ人が多いのに対し、スウェーデンやフランス、アメリカでは、その考え方に否定的な人が多く、性別での役割分担意識が弱いことがうかがえ

る。特に、スウェーデンでは肯定的な意見を持つ人は8.6%に過ぎず、9割の人が否定的である。

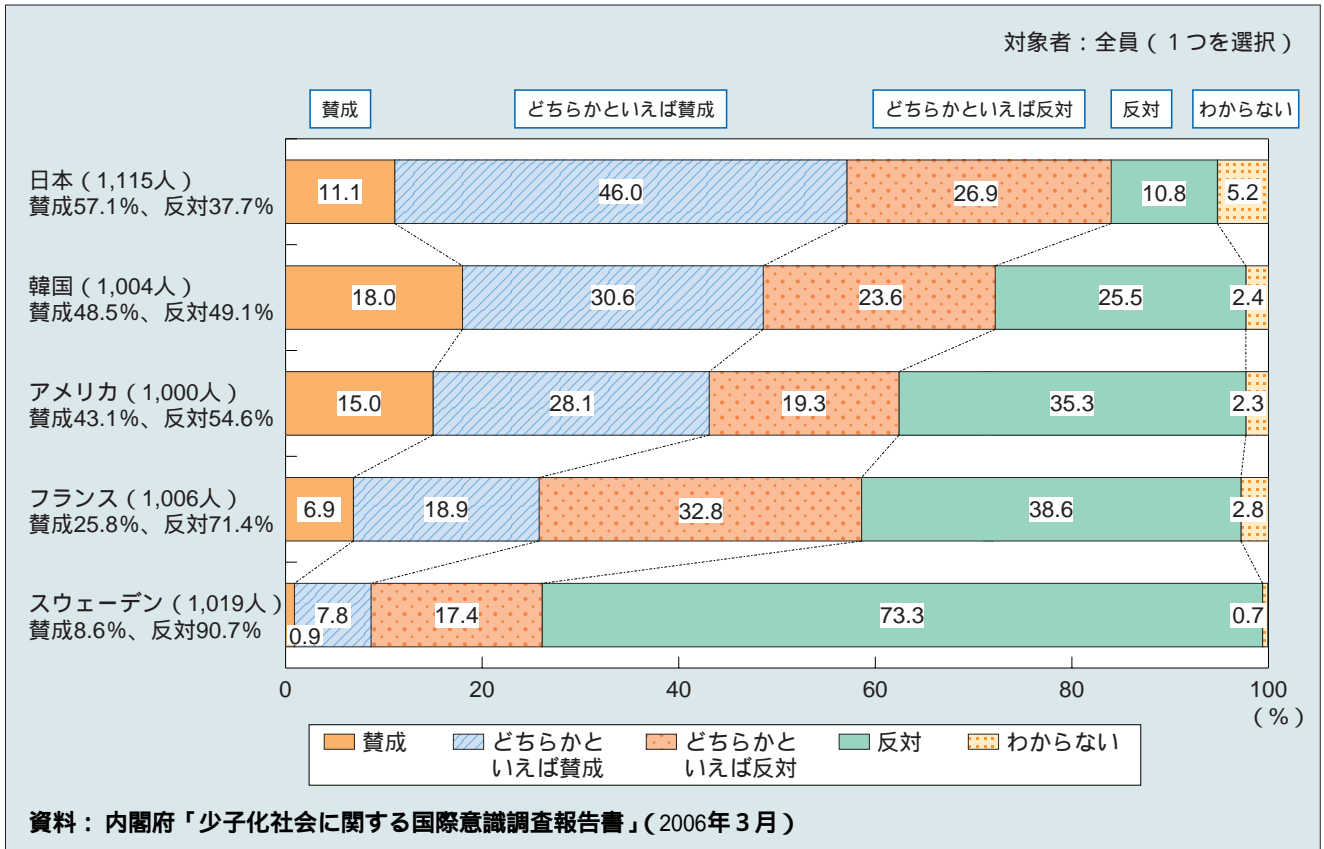
このような結果から、日本や韓国では、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という家庭内の役割分担の意識が強く、次に述べるように、実態上も子育てを妻に依存している。

次に、就学前の子どもの育児における夫・妻の役割分担について、「主に妻が行う」「もっぱら妻が行う」と「主に妻が行うが、夫も手伝う」の合計)と回答した割合が多かったのは、韓国(67.9%)と日本(66.8%)である。他方、「妻も夫と同じように行う」と回答した割合が多かったのは、スウェーデンが92.4%と大変高く、アメリカ(60.4%)、フランス(53.3%)も韓国・日本よりも高い。

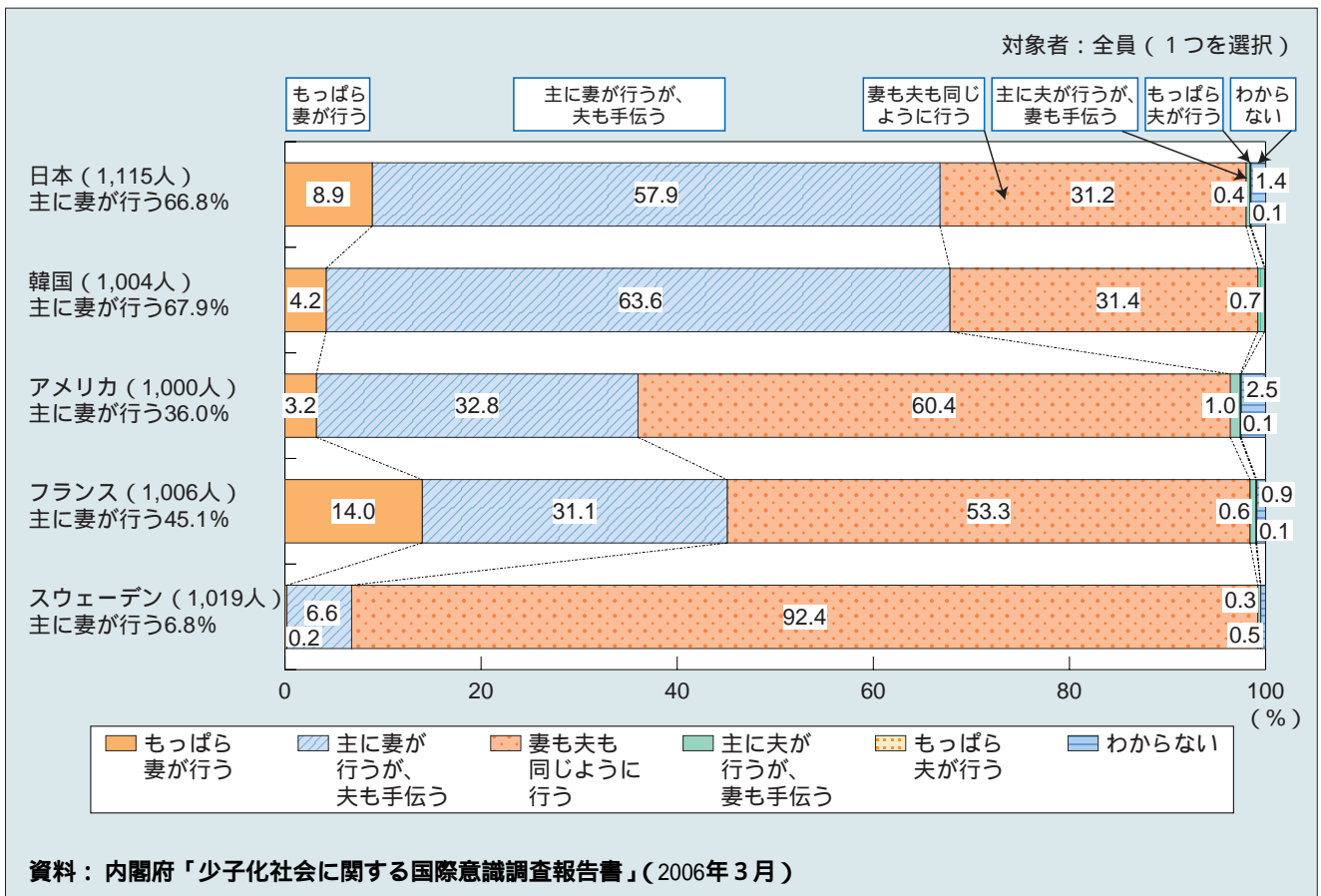
合計特殊出生率が低い日本や韓国では、子どもの育児を妻に依存する傾向がみられるのに対し、日本・韓国よりも合計特殊出生率が高いスウェーデンやアメリカ、フランスでは、夫婦で育児を分担している。

さらに、実際の子育て経験者の実態として、

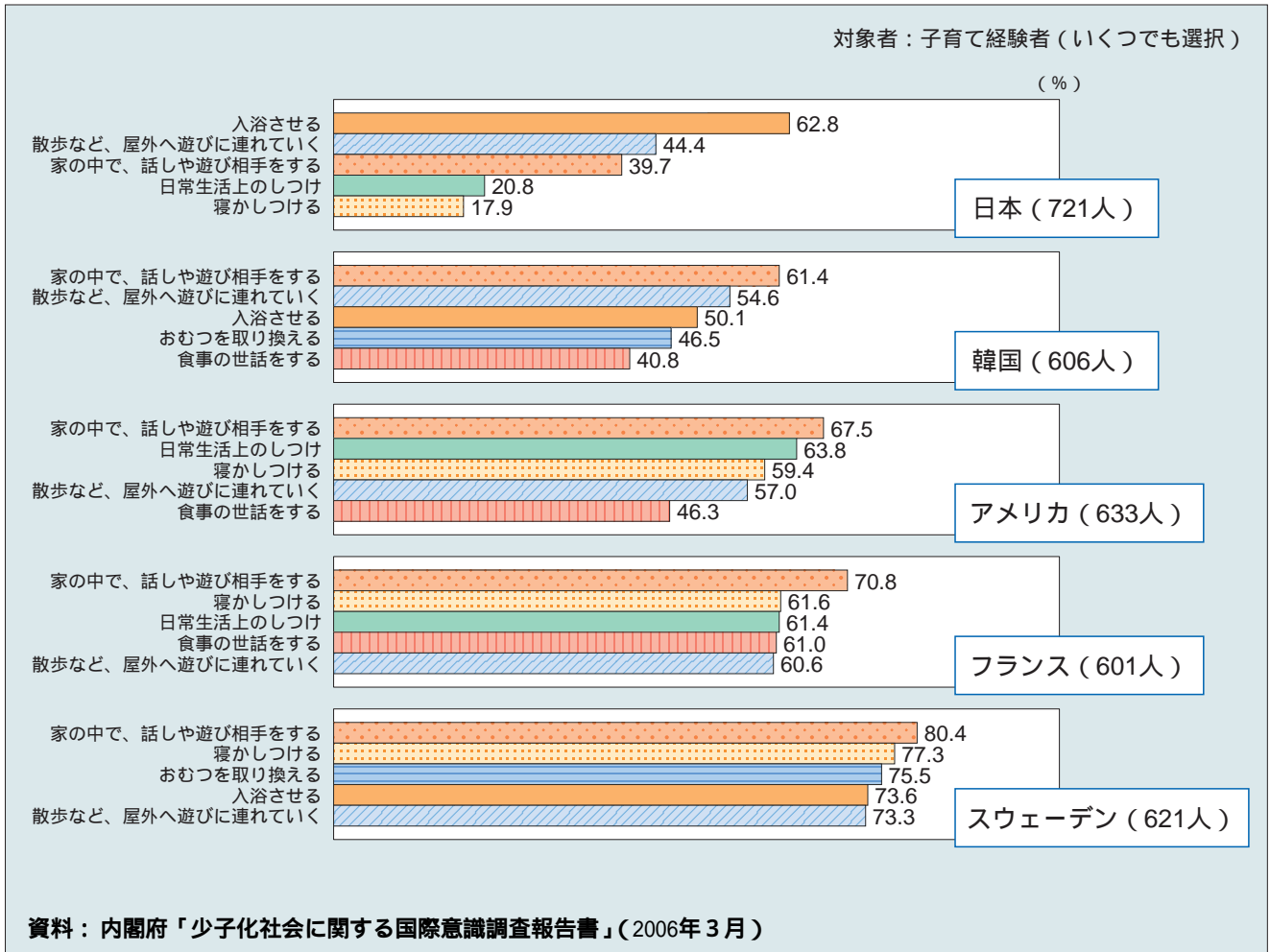
第1-5-11図 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について



第1-5-12図 就学前の子どもの育児における夫・妻の役割



第1-5-13図 育児の中で、妻よりも夫の方が主に行っていること



第5章

夫と妻が同程度あるいは夫の方が主として行っている（行っていた）ことでは、日本以外では「家の中で、話しや遊び相手をする」が最も多くなっている。「行っている」と回答したケースの全体的な割合をみると、日本は他の国よりも少ない傾向にある。日本では、夫と子どものふれあいやコミュニケーションが、比較的不足していることがうかがえる。

（3歳までは家庭で子どもを育てることについて）

子どもが3歳くらいまでの間は、保育所等を利用せずに母親が家庭で子どもの世話をすべきであるという考え方（いわゆる「三歳児神話」）について、肯定的な意見（「賛成」と「どちらかといえば賛成」の合計）が多かったのは、韓国（85.5%）、日本（67.8%）、アメリカ（62.7%）

である。他方、否定的な意見（「反対」と「どちらかといえば反対」の合計）は、スウェーデン（67.5%）、フランス（48.8%）で高くなっている。

実際、日本では、3歳未満の乳幼児のうち85%の子どもは、家庭で育てられている。一方、スウェーデンでは、0歳から1歳半までは父親・母親とも約8割の高率で育児休業制度を利用し、家で子育てをするが、育児休業が終了する1歳半以降は、保育所を利用しつつ仕事と育児を両立させながら子育てが行われている。また、フランスでも、0～2歳児の間でも、認定保育ママや保育所を早期に活用して働きながら子育てが行われていることが多い。

（子どもの生み育てやすさ）

自国が子どもを生み育てやすい国かどうか